

# 非体験世代における 昭和 30 年代の理想化と社会意識

浅岡隆裕

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

## 1 本稿の目的<sup>1</sup>

本稿は昭和年代（特に昭和 30 年代）が一般生活者において、どのように捉えられているのかを問題化している。周知のとおり、1990 年代後半以降、「昭和 30 年代ブーム」と呼ばれるノスタルジアやレトロ現象が続いている。具体的には、昭和の雰囲気や謳い文句とした商店街や商業施設の展開、博物館での昭和コーナーの開設、リバイバル商品の登場とヒット、といった社会現象にその広がりを見ることができる。昭和 30 年代を扱った様々な表現物（番組、映画、書籍、広告、イベントなど）が見られるが、「貧しかったけど、希望に満ち溢れていた」といったメッセージが強く打ち出されている点ではほぼ共通している（浅岡, 2012）。

ノスタルジア現象については、当時を生きた人にとっては懐古という心情から理解できるが、昭和 20 年代あるいは 40 年代がブームにならないのはなぜだろうか。30 年代である必然性は何だろうか。さらに、昭和 30 年代を直接体験していない若い世代でも、この年代に興味を示す人が一定数存在する。（生きられた経験による）“記憶の中の昭和 30 年代”が存在する一方で、“イメージとしての昭和 30 年代”がフィクション（物語）化して語られ、それが現代人の昭和 30 年代として像を結んでいる。こうしたメカニズムをメディアや社会心理から読み解いていく。

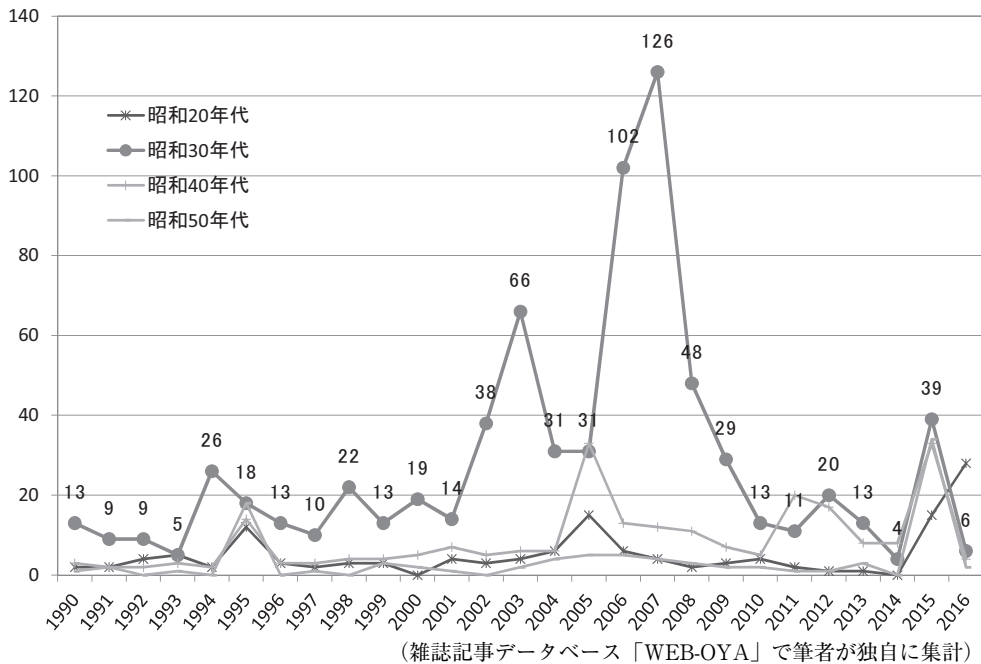
筆者らはこれまで、単なる懐かしさや郷愁＝ノスタルジアの語りではなくて、昭和の暮らし方を手本として、自らの生活に取り入れるといった「昭和ノスタルジア志向」がどの程度みられるのかについて調査してきた<sup>2</sup>。WEB モニターを利用したネット調査（2016 年 9 月実施）より、若年～中年層における古い時代（昭和年代）の「暮らし方の工夫や知恵を参考にしている」といった“実践者”は、少数に留まることが明らかになった（浅岡, 2018）。またしばしば昭和ノスタルジアと関連付けられる昭和 30 年代の時代イメージは、さほど特別視されているものではない。しかし昭和 30 年代を規範的・倫理的な観点から見習うべき対象とする意識<sup>3</sup>、そして「昭和の暮らし」の評価は少なからず示されていた。

本稿では昭和 30 年代を体験していない若年世代で一定数みられる昭和 30 年代を理想化する（「見習うところがある」）意識について、数量データを用いて他の社会意識との関わりから考察する。

## 2 研究の背景

昭和30年代に対する社会的注目は、雑誌記事といったメディア表象上では1990年代後半から始まり、2007年を一つのピークとしながらも現在も持続的にみられるものである。

図1 雑誌記事見出しにみる10年単位の「昭和」の増減 (単位:本)



すでに述べたように現代日本におけるノスタルジア現象については過去の時代体験を持つ人が当時を懐かしむ=懐古といった一過性のブームだけで説明しきれものではない。むしろ直接体験の有無にかかわらず過去のある時代にあったと考えられている特定の価値観や行動に範をとり、現代人としての生き方の再考を促すような生活意識やスタイルとして定着したのではないだろうか。こうした実態について検証するのが本研究の目的である。なお、本研究では、昭和時代全体を取り上げるのではなく、ノスタルジア現象と分かちがたく結びついている「昭和30年代」に絞って問題化している。

ノスタルジア、記憶、記憶とメディアに関する先行研究について触れておきたい。「ノスタルジア」や「集合的記憶(社会的記憶)」、あるいは隣接の心理学分野の「なつかしき」の研究については、知見の蓄積がある。そして学際的研究分野としての記憶研究(Memory Studies)が、1990年代以降、隆盛しており(浜井, 2017)、本研究もそのディシプリンに多くの示唆を受けているところである。またより近年の傾向としては昭和30年代に限らず、昭和40年代~60年代、そして平成年代といったように、比較的近い過去について、そのメディアの表象的特質について明らかにする研究が多く生産されるようになっている。

メディア表象研究の隆盛の背景にあるのは、過去の時代へ興味が喚起される＝ノスタルジアが喚起されるような社会思想的な状況・文脈という点が見逃せない。これらは、1990年代以降の東西冷戦終結後に急速に進展したグローバリゼーション、新自由主義、新保守主義といった政治・経済情勢、そして政治経済体制によって惹起された諸変化「社会の液状化」「リスク社会化」などと相互に密接の関わり合いを持っていることは容易に想定されうることである。

経済成長重視や効率性追求一辺倒の世相に対するアンチテーゼとして、ユートピア的な存在としての過去が持ち出されることはこれまでも社会変動期にはしばしば見られたことである。特定の時代（例えば、イギリスでは19世紀のビクトリア朝時代や1960年代）やコミュニティが思想的に見直されているのは、「成長から成熟へ」とシフトチェンジすべきだという論がよく語られる日本だけの現象ではないことにも留意したい。こうした思想的な社会的底流があったところに2011年3月の東日本大震災といった未曾有の自然災害が発生し、人との絆やコミュニティ重視という流れがまた強まって、今日に至っている。「昭和30年代に学ぶコミュニケーション」といった文脈において、家族や地域社会の価値が主張されるようになってきている（宮田，2016）。

昭和30年代を理想化する意識は特定の社会意識や価値観といかに関わっているのだろうか。

しばしば昭和ノスタルジアと関連付けられる昭和30年代の時代イメージは、近現代史の時代区分の中でまなざされた場合、さほど特別視されているものではない。しかし昭和30年代を規範的・倫理的な観点から“見習うべき対象”とする意識、そして「昭和の暮らし」の好評価は、調査パネルには少なからず示されていた（浅岡，2018）。昭和30年代についての知識は、直接体験者ではない若年層では、主にマスメディア、テーマパークや展示空間、世代間コミュニケーションの3つのルートによって得られている。昭和30年代についてほとんど知らないといった自己認識は持たれていたが、それでも昭和30年代は見習うべき対象であるといったイメージが保持されていたのは興味深い結果であった。

その見習うべき分野について、年代によって濃淡が見られ、直接体験を持つ高年層の方が、20～40代の見習うべきという人よりも、高い割合を示すことがほとんどであった。当時の時代を体験していた高年層世代の方が、体験のみならず、知識も有しており、そうではない若年層よりも肯定的に捉えることは事前に想定できた。それが実証的に裏付けられた。

「昭和の暮らし」へ共鳴を示す層と合わせ、古い時代（昭和年代）の「暮らし方の工夫や知恵を参考にしている」回答者は、調査結果では少数であるが、一定数存在することも明らかになった。

### 3 方 法

本稿で取り上げる調査課題は、①直接体験がある高年層と、直接体験がないはずの若年層といった年代による違い、②昭和30年代を体験していない若年世代の中でも一定数みられる昭和30年代を理想化する（“見習うところがある”）意識について、他の意識や行動とどのように関わっているのか、の2点であった。得られたデータは、通常のクロス集計に加え、相関分析、重回帰分析といった多変量解析の手法を用いて、価値態度の構造全体の解明を目指している。

国勢調査に基づく実勢人数割合に近似させた調査対象パネルに対してインターネットを介したアンケート調査を実施した。調査期間は2018年2月、回収総数は2,078サンプルであった。年代的な内訳は、図2に示すとおり、60代が25%、次に40代が20%といった割合が目立つところである。そのうち、昭和30年代を直接体験していない世代である20～40代の割合は50%であり、回収サンプル数は1,036であった。本稿では、この20～40代を《非体験世代》と総称し、これ分析ベースとして進めていく。

50代については、年齢によっては、昭和30年代を直接に体験していることになり、50代というだけで一括りに論じることは困難であるために、今回の分析対象から除外している。

20～40代の基本属性について記しておく、性別（図3）では男女ほぼ半々となっている。

図2 調査対象者の年代構成

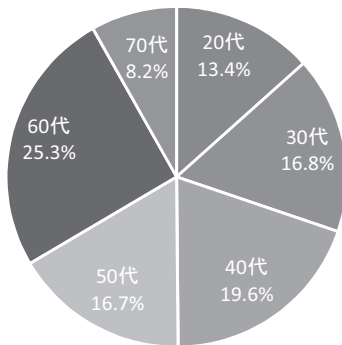
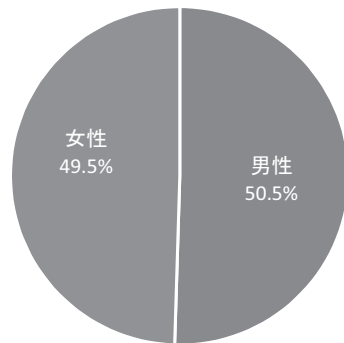


図3 性別（20～40代ベース、1036サンプル<sup>4)</sup>）



最終学歴（図4）は大学が45%と最多であり、高校は25%、短大・高専18%が続いている。結婚の有無（図5）は未婚者が51%、事実婚を含む既婚者は45%となっている。結婚の有無については二分されている状態である。

図4 最終学歴

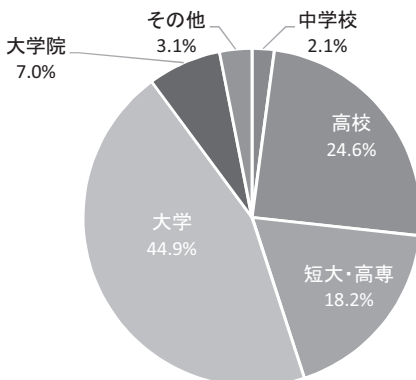
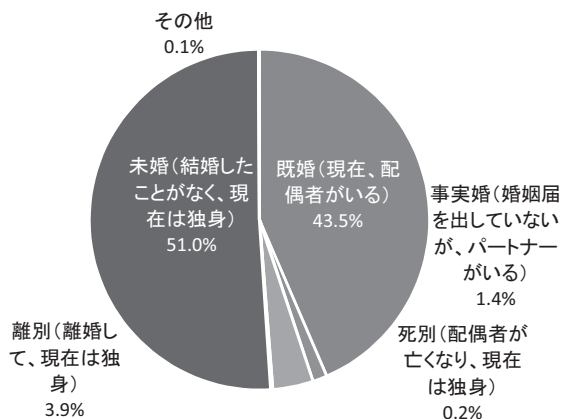
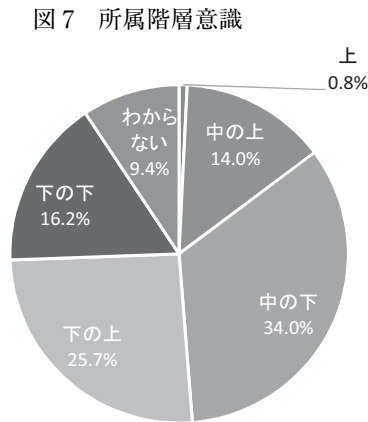
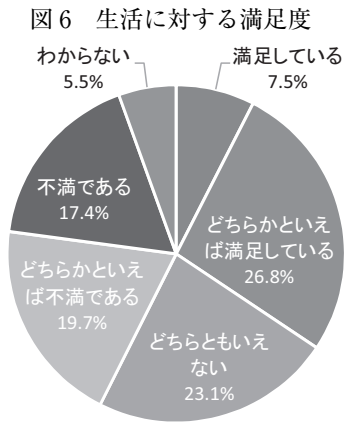


図5 結婚の有無



生活に対する満足度（図6）は、満足している人は8%と少数であり、どちらかといえば満足を含わせても34%となり、全体の1/3に留まる。不満は37%となり、満足とほぼ同じ割合となっている。

所属階層意識（図7）については、中の上14%+中の下34%合わせて48%と半分近くの人が中と認識している。上は42%と中よりやや少ない程度で高い割合となっている。



## 4 結 果

### 1) 非体験世代で、昭和30年代を理想化するのとはどのような人や態度保持者か

「昭和30年代に見習うべきことがありますか」という設問への回答を年代別に示した（表1 p<0.05）。50代<sup>5</sup>を除いた全年代平均では「見習うところが多い」は10%と少数であるが、「ある程度見習うところがある」47%と合わせて、57%が昭和30年代を見習うべき対象としている。20～40代の非体験世代でも、「見習うところが多い」7%、「ある程度見習うところがある」39%と併せて46%と、理想化する見方は半数近く存在している。

表1 年代別の「昭和30年代に見習うべきことがありますか」（50代を除く）

		EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。					
		N	見習うところが多い	ある程度見習うところがある	見習うところはあまりない	見習うところはない	わからない
年代	20-40代	1036	6.8%	39.4%	11.1%	7.7%	35.0%
	60-70代	696	13.8%	57.6%	9.8%	3.0%	15.8%
	全体	1732	9.6%	46.7%	10.6%	5.8%	27.3%

ではどのような人々が昭和30年代を見習うべきとしているのか。非体験世代において、見習うところがある（以下、「理想化傾向」）を従属変数として、性別、年齢、最終学歴といったデモグラ

フィカルな属性、さらには生活全般満足度、階層、暮らし向きと重回帰分析を行った（表2 強制投入法、 $R=0.161$   $R^2=0.026$ ）。

その結果、生活全般満足度のみが、説明力を有する要素として抽出された。基本属性、階層、暮らし向きではあまり理想化には影響を与えておらず、現状の私生活に満足していることによって理想化する傾向が強まっていることが示唆される。

表2 基本属性と昭和30年代理想化との重回帰分析結果（20～40代）

係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	2.494	.334		7.469	.000
	性別	.076	.098	.027	.773	.440
	年齢	-.006	.006	-.035	-1.039	.299
	学歴_中学高校	.129	.204	.040	.634	.526
	学歴_短大高専	.168	.212	.047	.792	.429
	学歴_大学	.147	.187	.052	.790	.430
	生活全般満足度	.173	.047	.154	3.693	.000
	階層	.020	.073	.014	.278	.781
	暮らし向き	.002	.083	.001	.023	.982

a. 従属変数 EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。

生活満足度と昭和30年代理想化のクロス集計結果は表3の通りである（ $p<0.05$ ）。生活全般について満足していることによって、より高次の欲求充足を求められるようになった場合、その一つの選択肢として昭和30年代から想起される理想イメージがあるのではないか。

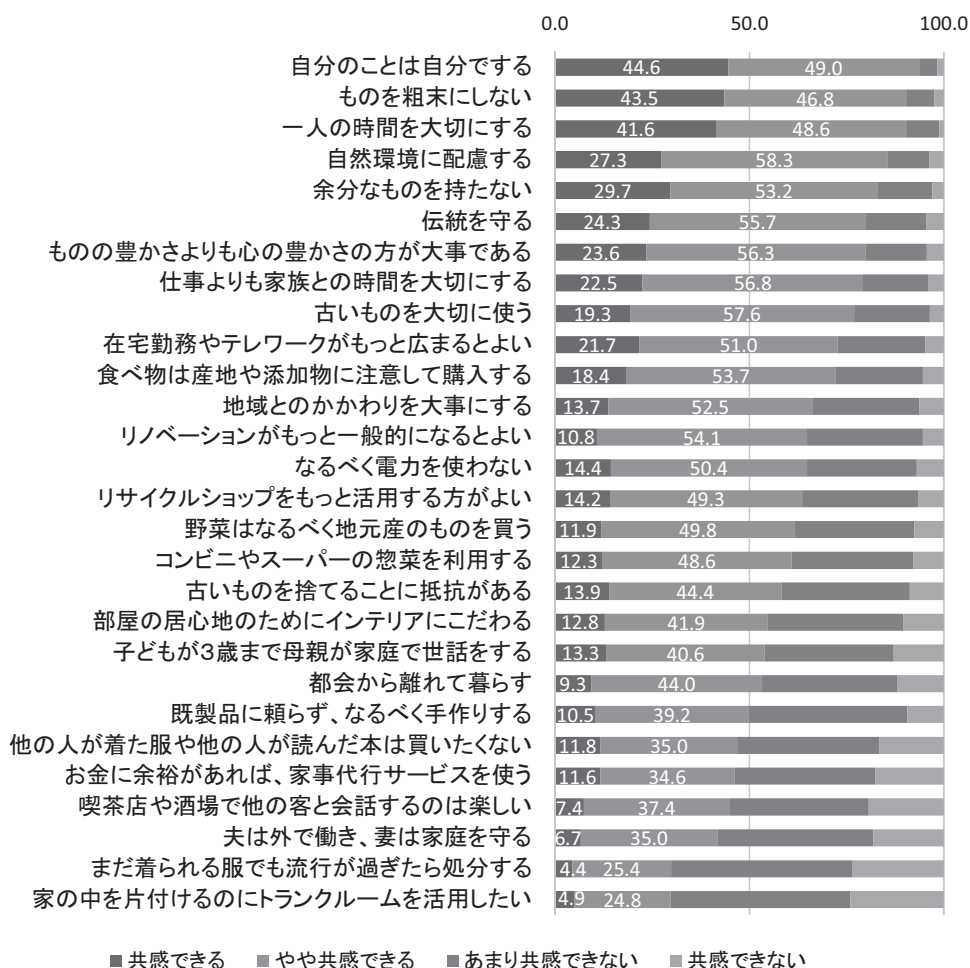
表3 非体験世代の生活満足度と昭和30年代理想化

		N	EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。				わからない
			見習うところが多い	ある程度見習うところがある	見習うところはあまりない	見習うところはない	
生活満足度	満足している	78	16.7%	43.6%	7.7%	9.0%	23.1%
	どちらかといえば満足している	278	6.5%	53.6%	11.5%	5.8%	22.7%
	どちらともいえない	239	4.6%	33.5%	12.1%	6.7%	43.1%
	どちらかといえば不満である	204	8.3%	41.2%	13.2%	6.4%	30.9%
	不満である	180	6.1%	30.6%	11.1%	12.8%	39.4%
	全体	979	7.2%	41.1%	11.6%	7.7%	32.5%

社会意識項目について、態度項目を示し、それに対する肯定度合いを回答してもらった（図8）。意識項目について共感の高さでソーティングした場合、上位になるのは、自分のことは自分でする、ものを粗末にしない、一人の時間を大切にする、自然環境に配慮する、余分なものを持たない、伝統を守る、ものの豊かさよりも心の豊かさといったように、比較的、反対の立場を取りづらい、社会的な位置づけがはっきりとしたものとなっている。

逆に、価値が定まっていないものとしてトランクルームや家事代行サービスなどの利用、着られる服の処分、他人が使用したもの（ユーズド商品）の利用、そして「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」といった考えや喫茶店や酒場でのコミュニケーションをとることについては、あまり共感が得られない結果となった。共感する人と、しない人に分かれる傾向にある。

図8 非体験世代の社会意識（「共感で+「やや共感」割合高い順にソーティング）



昭和30年代理想化を従属変数<sup>6</sup>、28項目からなる社会意識項目を説明変数として重回帰分析（表4 ステップワイズ法、R=0.459、R<sup>2</sup>=0.211）を行った。

説明力を有する変数としては、標準化係数が高い順に◀ものの豊かさよりも心の豊かさの方が大

事である>>「仕事よりも家族との時間を大切にする」>>「古いものを捨てることに抵抗がある」>>「伝統を守る」>>「子どもが3歳までは母親が家庭で世話をすべきだ」などであった。昭和30年代の理想化傾向については、精神的充足重視、伝統や自分の身近なものを大事にするといった意識が関わっている。

表4 意識項目と昭和30年代理想化との重回帰分析結果 (20~40代)

係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
8	(定数)	.789	.159		4.957	.000
	BQ1_11 もの豊かさよりも心の豊かさの方が大事である	.166	.044	.152	3.774	.000
	BQ1_3 伝統を守る	.135	.042	.126	3.196	.001
	BQ1_26 仕事よりも家族との時間を大切にする	.149	.041	.137	3.611	.000
	BQ1_12 古いものを捨てることに抵抗がある	.127	.036	.132	3.517	.000
	EQ14_「子どもが3歳くらいまでは母親が家庭で子供の世話をすべき」	.104	.034	.107	3.063	.002
	BQ1_20 家の中を片付けるのにトランクルームを活用したい	-.114	.037	-.118	-3.103	.002
	BQ1_19 リノベーションがもっと一般的になるとよい	.105	.045	.095	2.358	.019
	BQ1_18 都会から離れて暮らす	.081	.037	.083	2.157	.031

a. 従属変数 EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。

ところで、昭和30年代の理想化傾向と関わり合いを持つ「伝統を守る」という態度について検討しておきたい。他の意識項目との相関分析(表5)を行ったところ、自然環境やものに対する配慮であり、地域社会との関わり合いなども指摘できる。子育ての担い手や就労に関する性別役割分業に近い態度項目との相関性は低く、保守的な志向としての「伝統」の意味づけは希薄であると思われる。

さらに別の見方として「魅力を感じるまち」の項目(9つのまちのタイプの魅力度)についての選好度合いを回答してもらった(図9)。

大型商業施設で買い物ができるまちについては、67%と2/3から魅力を感じられたが、利便性や買い物のしやすさなどが考慮された結果ではないか。一方で、古い建物が残るまち64%、個人商店で買い物ができるまち56%から魅力を感じるとされている。地域の結びつきを示すような「子供会活動」「近隣の人々とのつながり」「町内会活動」などが盛んであることは、まちの魅力に結びつくようなものではないことが示された。



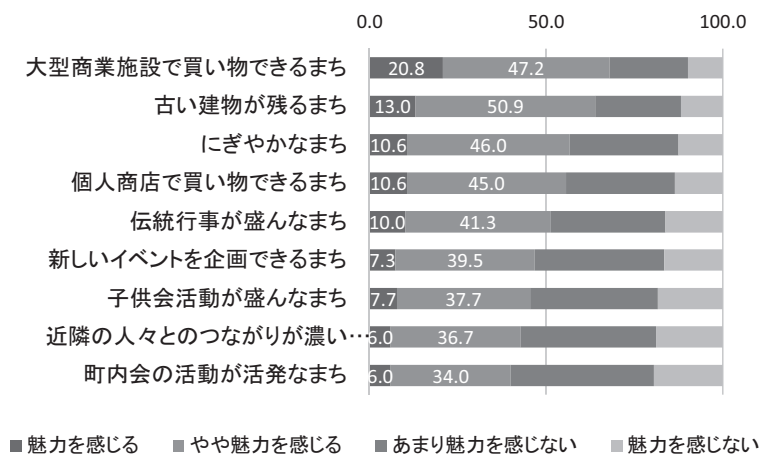
表5 意識項目「伝統を守る」と他意識項目との相関分析<sup>7</sup>結果（20～40代）

BQ1_3 伝統を守る	
BQ1_2 自然環境に配慮する	.588**
BQ1_4 ものを粗末にしない	.536**
BQ1_8 古いものを大切に使う	.523**
BQ1_6 地域とのかかわりを大事にする	.519**
DQ1_2 伝統行事が盛んなまちに魅力を感じる	.453**
BQ1_1 自分のことは自分です	.432**
BQ1_9 食べ物は産地や添加物に注意して購入する	.424**
BQ1_11 ものの豊かさよりも心の豊かさの方が大事である	.413**
BQ1_5 余分なものを持たない	.391**
BQ1_22 野菜はなるべく地元産のものを買う	.387**
BQ1_7 既製品に頼らず、なるべく手作りする	.381**
EQ14「子どもが3歳くらいまでは母親が家庭で子供の世話をすべき」	.141**
EQ13「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」	.090**

\*\*：相関係数は1%水準で有意（両側）です。

\*：相関係数は5%水準で有意（両側）です。

図9 非体験世代の魅力を感じるまち（「魅力+「やや魅力」割合高い順にソーティング）



魅力を感じるまちと昭和30年代理想化の重回帰分析（表6 ステップワイズ法、 $R=0.437$ ,  $R^2=0.191$ ）では、古い建物が残る、伝統行事が盛ん、個人商店で買い物ができる、といったものであった。利便性、機能性を重視した現代的な都市というよりも、古い街並み、伝統を有し、個人経営の店が機能している場所に魅力を感じる人が昭和30年代を理想化する傾向にあるといえる。

表6 魅力を感じるまち項目と昭和30年代理想化との重回帰分析結果(20~40代)  
係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
3	(定数)	1.144	.098		11.733	.000
	DQ1_9 古い建物が残るまち	.211	.043	.218	4.888	.000
	DQ1_2 伝統行事が盛んなまち	.151	.042	.163	3.620	.000
	DQ1_5 個人商店で買い物できるまち	.136	.042	.140	3.221	.001

a. 従属変数 EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。

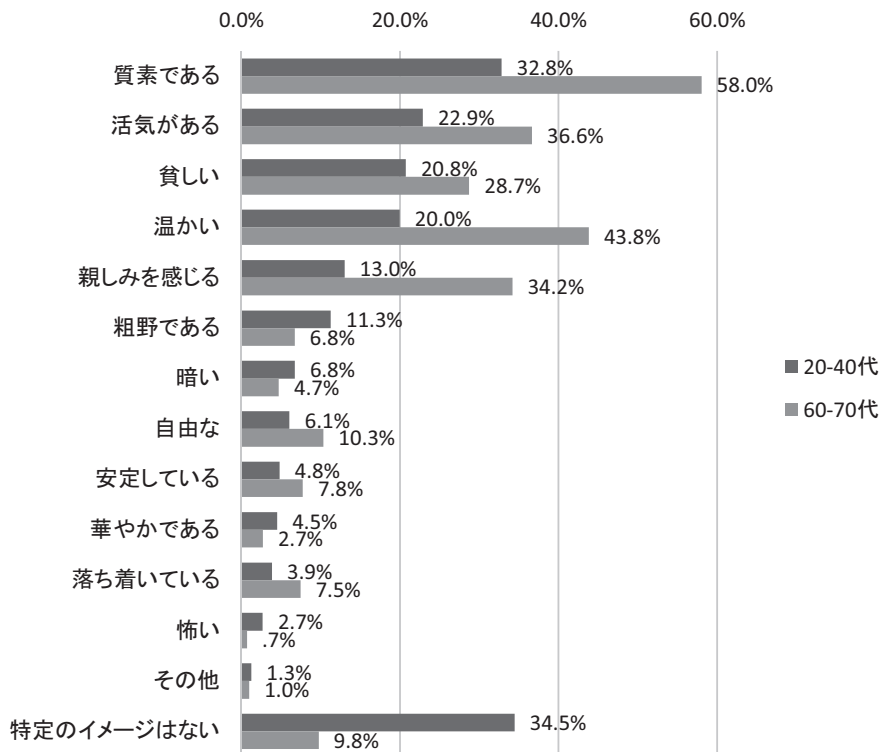
## 2) 30年代を理想化する人のイメージと認知源

昭和30年代についてどのようなイメージ(12のイメージ項目)がもたれているのか(図10)。

20~40代では質素である(33%)、活気がある(23%)、貧しい(21%)、温かい(20%)などがまとまった割合で挙げられているが、強いイメージがもたれていない様子である。60~70代と比較すると、質素である、温かい、親しみを感じるなどといった項目では、60~70代が20ポイント以上、割合が高くなっている点が目を引く。

20~40代では特定のイメージはないという人も35%と1/3程度を占めている。

図10 「昭和30年代」についてのイメージ(割合高い順にソーティング)



それらのイメージと理想化はいかに関係しているのか、重回帰分析（表7 ステップワイズ法、 $R=0.410$   $R^2=0.168$ ）を行ったところ、「活気がある」「温かい」「質素である」「親しみを感じる」といったイメージ項目が影響していることがわかった。昭和30年代について語っているメディア上でよくみられるようなキーワード（浅岡, 2012）が抽出された。

表7 昭和30年代イメージと昭和30年代理想化との重回帰分析結果（20～40代）

係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
4	(定数)	.331	.184		1.805	.072
	EQ7_1【活気がある】	.420	.063	.241	6.662	.000
	EQ7_8【温かい】	.314	.070	.174	4.469	.000
	EQ7_4【質素である】	.271	.059	.166	4.593	.000
	EQ7_7【親しみを感じる】	.167	.079	.080	2.111	.035

a. 従属変数 EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。

また「昭和の暮らし」からのキーワード想起（21のイメージとキーワード項目）についてたずねている。（表11）

20～40代が昭和の暮らしからの想起イメージとしては、ものを大切にする（51%）、人づきあいが濃密（37%）などが目立つところであり、印象として定着していることがうかがわれる。手作り、丁寧な暮らしといった印象も2割から挙げられていた。60～70代との比較においては、60～70代の方が全般的に高い割合となっているが、とくに、ものを大切にする、四季を感じる、手作りといった項目では、20ポイント以上高くなっているところである。

それらのキーワードと昭和30年代の理想化の関係性を探った（表8 ステップワイズ法、 $R=0.409$   $R^2=0.167$ ）。その結果、<ものを大切にする><四季を感じる><不潔ではない（「不潔」の反転）><伝統を重んじる><丁寧な暮らし><のんびりしている>といったキーワード群が理想化に関わっていることが示された。やはり、肯定的なイメージが理想化に関わっていることがうかがわれる。

次に昭和30年代の認知源について問うている（図12）。

テレビ番組（58%）、映画（24%）、雑誌や書籍（15%）といったメディア的なもの、そして祖父母や父母から話を聞いた（38%）のような人的ネットワークといった2大要因が挙げられた。さらには学校教育、博物館・歴史の展示施設といった教育的な機会も認知源になっていることが認められる。60～70代は直接体験と街並みや風景が身近にあったなども高い割合となっている。

どのような認知源が理想化に影響を与えているのかについての重回帰分析（表9 ステップワイズ法、 $R=0.265$   $R^2=0.070$ ）では、祖父母や父母から話を聞いたといった対人関係が高い説明力を有し、次に、映画やテレビ番組といった映像メディアなどの影響がみられた。

図11 「昭和の暮らし」についてのイメージ（割合高い順にソーティング）

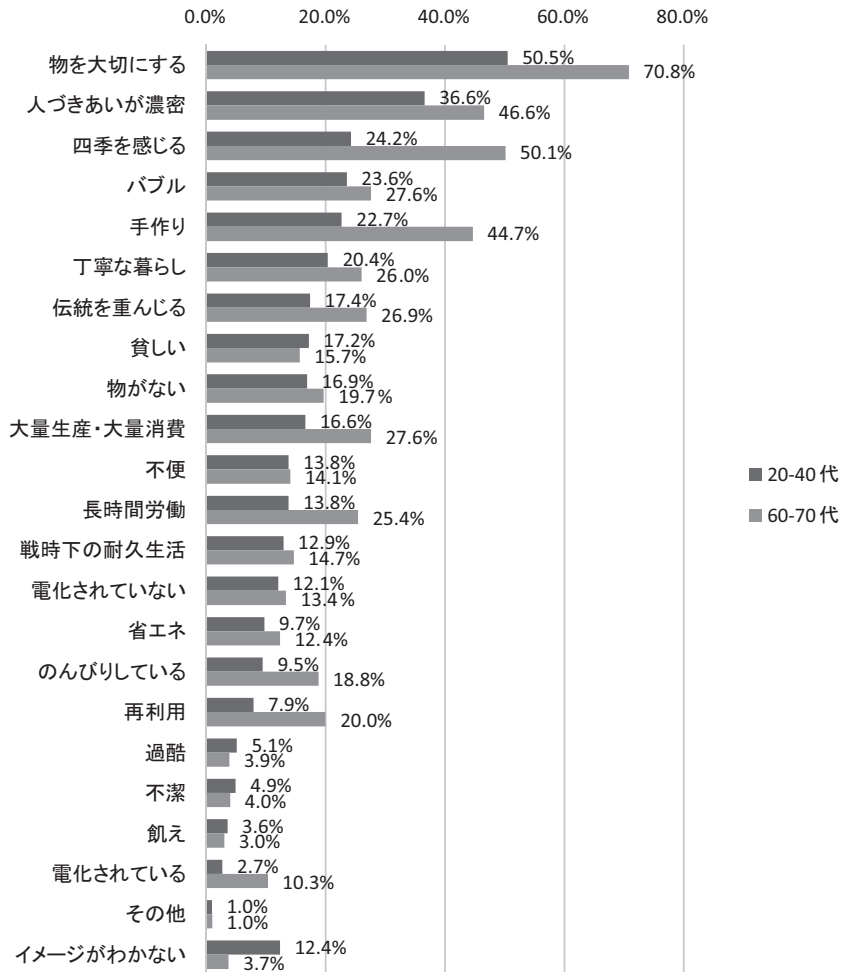


表8 「昭和の暮らし」イメージと昭和30年代理想化との重回帰分析結果（20～40代）  
係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
7	(定数)	.996	.352		2.834	.005
	AQ1_3【物を大切にする】	.351	.062	.214	5.641	.000
	AQ1_6【四季を感じる】	.231	.070	.129	3.280	.001
	AQ1_18【不潔】	-.449	.130	-.123	-3.455	.001
	AQ1_14【伝統を重んじる】	.165	.076	.083	2.159	.031
	AQ1_4【丁寧な暮らし】	.168	.073	.089	2.307	.021
	AQ1_21【のんびりしている】	.211	.093	.082	2.261	.024
	AQ1_9【大量生産・大量消費】	.164	.074	.079	2.202	.028

a. 従属変数 EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。

図12 「昭和30年代」についての認知源（認知者ベースで、割合高い順にソーティング）

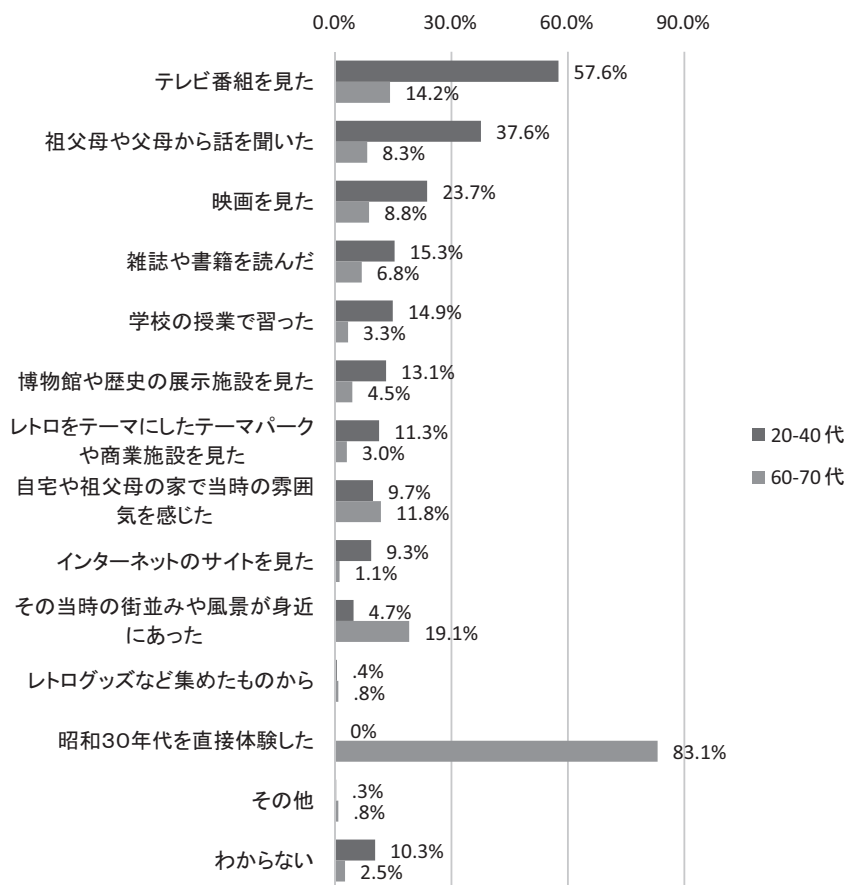


表9 昭和30年代の認知源と昭和30年代理想化との重回帰分析結果（20～40代）

係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
3	(定数)	1.162	.170		6.843	.000
	EQ8_2【祖父母や父母から話を聞いた】	.321	.061	.214	5.251	.000
	EQ8_4【映画を見た】	.202	.069	.121	2.935	.003
	EQ8_3【テレビ番組を見た】	.136	.062	.090	2.175	.030

a. 従属変数 EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。

### 3) 過去を理想化する態度全般との関わりから

「あなたは、いつ頃の時代・年代の何がよかったですか? “バブル期の華やかさ” など、具体的にいくつかでもお答えください」という設問で自由回答された記述をコーディングし、クロス集計した(表10 回答者ベースで集計)。全体では昭和、高度成長、子供、バブル期、といったものが想起されている。昭和30年代については非体験世代で挙げる人はごくわずかであり、純粹想起レベルでは、昭和30年代がよい時代とは認識されていないことがわかった<sup>8)</sup>。

表10 いつの時代、年代の何がよかったかの自由回答(年代別 MA / 上位10のみ表示)

		EQ1 いつ頃の時代・年代の何がよかったですか? 具体的にいくつかでもお答えください。										
		N	昭和	高度成長	子供	バブル期	昭和30年代	昭和40年代	付き合い	ゆとり・のんびり	1980年代	1990年代
年代	20-40代	282	14.2%	14.5%	12.1%	18.1%	0.7%	1.8%	7.1%	9.2%	8.9%	8.9%
	60-70代	326	20.6%	12.3%	12.9%	4.6%	16.6%	15.3%	10.7%	7.4%	4.0%	0.9%
	全体	608	17.6%	13.3%	12.5%	10.9%	9.2%	9.0%	9.0%	8.2%	6.3%	4.6%

1980年代を見習うべき時代とする割合は昭和30年代のそれに比べると、10ポイントほど低い傾向にある(表11  $p<0.05$ )。非体験世代である20代は他年代よりも理想化傾向が低い。

「過去の日本社会はよかったです」と思うことがあるか(表12  $p<0.05$ )については、「よくある」

表11 年代別の「1980年代に見習うべきことがあると思いますか」

		EQ9 1980年代に見習うべきことがあると思いますか。					
		N	見習うところが多い	ある程度見習うところがある	見習うところはあまりない	見習うところはない	わからない
年代	20代	278	5.8%	25.9%	16.5%	13.7%	38.1%
	30代	350	3.4%	36.3%	18.6%	8.6%	33.1%
	40代	408	3.9%	38.5%	20.1%	9.3%	28.2%
	50代	346	7.5%	39.0%	21.7%	6.6%	25.1%
	60代	526	6.7%	48.1%	19.6%	4.4%	21.3%
	70代	170	5.9%	54.1%	18.8%	3.5%	17.6%
	全体	2078	5.5%	40.2%	19.4%	7.6%	27.2%

表12 年代別の「過去の日本社会はよかったです」と思うことがあるか

		EQ1 「過去の日本社会はよかったです」と思うことがありますか。				
		N	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない
年代	20代	278	4.7%	33.5%	37.8%	24.1%
	30代	350	5.7%	42.9%	34.3%	17.1%
	40代	408	9.1%	45.8%	32.4%	12.7%
	50代	346	13.0%	53.2%	28.0%	5.8%
	60代	526	11.4%	58.7%	27.8%	2.1%
	70代	170	10.6%	65.9%	19.4%	4.1%
	全体	2078	9.3%	49.8%	30.5%	10.4%

「ときどきある」を含めて6割となっている。最も割合が低い20代でも4割があると回答しており、理想を過去の日本社会に求める傾向は広くみられることが明らかになった。

「過去の日本社会はよかったと思うことがある」について、基本属性や昭和30年代、1980年代それぞれの理想化との重回帰分析（表13 強制投入法、 $R=0.489$   $R^2=0.240$ ）した。昭和30年代、1980年代それぞれを理想化する見方などが影響していることが明らかになった。

ところで現状の日本社会に対して不満がある人の方が、“昔はよかった”と過去を美化するといった構図がみられると仮定していたが、日本社会への満足度と過去の日本社会の見方については関係が明瞭に見られなかった。個人の生活満足度は過去の理想化にマイナスに作用している。

表13 「過去の日本社会はよかった」といった見方に対する重回帰分析結果（20～40代）

係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	1.638	.247		6.621	.000
	性別	.022	.063	.014	.358	.721
	年齢	-.008	.004	-.082	-2.124	.034
	学歴_中学高校	-.151	.122	-.081	-1.236	.217
	学歴_短大高専	.084	.127	.041	.659	.510
	学歴_大学	.014	.108	.009	.133	.894
	生活全般満足度	-.087	.031	-.139	-2.830	.005
	階層	.017	.045	.021	.375	.708
	暮らしむき	.015	.049	.018	.311	.756
	昭和30年代に見習うべき	.326	.047	.321	6.888	.000
	1980年代に見習うべき	.204	.048	.199	4.270	.000
	現在日本社会満足度	-.012	.043	-.012	-.270	.787

a. 従属変数 EQ1 あなたは「過去の日本社会はよかった」と思うことがありますか。

個人の生活満足度と過去の理想化の関係をクロス集計してみると表のようになる（表14  $p<0.05$ ）。生活満足度が高いほど、過去の日本社会はよかったと思うことはない。逆に言えば、生活満足度について不満であることで、日本社会はよかったと思うことがあるとの回答傾向が読み取れる。

過去の理想化と昭和30年代理想化の関係性をクロス集計してみると表15（ $p<0.05$ ）のようになる。過去の日本社会はよかったと思う人で、昭和30年代の理想化をしていること、過去の日本社会はよかったと思わない人では昭和30年代は理想化しない、あるいは「わからない」とする回答パターンがうかがわれる。

過去の日本社会をよかったと思う意識を従属変数、28項目からなる社会意識項目を説明変数として重回帰分析（表16 ステップワイズ法、 $R=0.409$   $R^2=0.161$ ）を行った。標準係数が高い順に、〈夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである〉が最も説明力が高く、続いて〈伝統を守る〉

表14 生活満足度別の「過去の日本社会はよかった」と思うことがあるか

		EQ1「過去の日本社会はよかった」と思うことがありますか。				
		N	よくある	ときどきある	あまりない	ほとんどない
生活満足度	満足している	78	7.7%	38.5%	34.6%	19.2%
	どちらかといえば満足している	278	6.8%	45.7%	35.6%	11.9%
	どちらともいえない	239	4.6%	38.1%	39.3%	18.0%
	どちらかといえば不満である	204	6.9%	48.5%	32.8%	11.8%
	不満である	180	10.6%	41.7%	26.7%	21.1%
	わからない	57	1.8%	14.0%	38.6%	45.6%
	合計	1036	6.8%	41.5%	34.5%	17.3%

表15 過去の日本社会理想化と昭和30年代理想化の関係性

		EQ9 今の日本社会において、昭和30年代に見習うべきことがあると思いますか。					
		N	見習うところが多い	ある程度見習うところがある	見習うところはあまりない	見習うところはない	わからない
過去の日本社会の理想化	よくある	70	34.3%	42.9%	5.7%	2.9%	14.3%
	ときどきある	430	8.1%	56.0%	8.4%	2.8%	24.7%
	あまりない	357	2.0%	32.8%	15.7%	7.6%	42.0%
	ほとんどない	179	2.2%	11.2%	10.6%	21.8%	54.2%
	全体	1036	6.8%	39.4%	11.1%	7.7%	35.0%

表16 「過去の日本社会はよかった」といった見方に対する重回帰分析結果(20~40代)

係数<sup>a</sup>

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
8	(定数)	1.021	.129		7.896	.000
	BQ1_8 古いものを大切に使う	.132	.043	.113	3.083	.002
	EQ13「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」	.189	.029	.188	6.536	.000
	BQ1_11 ものの豊かさよりも心の豊かさの方が大事である	.142	.039	.127	3.626	.000
	BQ1_3 伝統を守る	.147	.039	.132	3.789	.000
	BQ1_18 都会から離れて暮らす	.062	.033	.060	1.898	.058
	BQ1_9 食べ物は産地や添加物に注意して購入する	-.145	.039	-.133	-3.702	.000
	BQ1_19 リノベーションがもっと一般的になるとよい	.095	.039	.082	2.432	.015
	BQ1_22 野菜はなるべく地元産のものを買う	.076	.038	.070	1.997	.046

a. 従属変数 EQ1 あなたは「過去の日本社会はよかった」と思うことがありますか。



《ものの豊かさよりも心の豊かさの方が大事である》といった、昭和30年代理想化傾向の重回帰分析で上がった項目と同じものが続いた。《食べ物や産地や添加物に注意して購入する》意識は、よかったと思う意識をマイナス方向に規定している。

過去の理想化については、保守的な意識が過去の日本をよかったとする思想へと結びつき、自身で生活を防衛するような意識は過去の日本をよかったとする思想を否定するものであったといえる。これは昭和30年代理想化意識とはやや異なる構造である。

#### 4 結 論

昭和30年代を見習うべき時代とする見方は、基本属性や経済状況では違いはなく、個人の生活満足度との関わりがまず明らかになった。社会意識としては精神的充足、伝統や自分の身近にあるものを大切にするといった価値観、そして古さ、伝統、個人的なつながりを有するまちに魅力を感じるといった選好が関わっている。これらはいずれも、過去のある時代には存在したものの現在では失われているものや価値観であり、それらがあった理想的な時代として昭和30年代および「昭和の暮らし」が想起されているようである。

こうした見方の形成には、個人的な人間関係や映画、テレビなどのメディアを通して、肯定的なイメージ付けをされたレベルでの影響が考えられる。

自由回答結果で示されたように「昭和」や「高度成長」といった戦後の日本社会はよかったという見方は広く共有されている。昭和30年代については「よい時代」とはあまり認識されていないにもかかわらず、理想的な時代とされるなど、両義的な評価がされている点に特色がある。同じ昭和時代に含まれ、近年では懐古の対象となりつつある1980年代については、見習うべきものがあるといった捉え方は、昭和30年代に比べると低い割合である。今の日本社会に対する満足度は、過去をよかったとする見方とは直接的には関係していないことも明らかになった。

総じて言えば、非体験世代において、昭和30年代は憧れの対象というよりも、精神的充足や伝統、身の回りを重視するような価値観をシンボライズする存在ではないだろうか。そのために、現代の生活を根本的に改めるようなオルタナティブとして昭和30年代が志向されているというよりも、現状を維持しつつも、何かしら部分的にとり入れていく一つの規範的モデルとしての昭和30年代という印象が持たれていることが推察される。

このような解釈は過去の日本社会をよかったと思う意識と比較するとより鮮明になってくると思われる。過去の日本社会を理想とする見方は、保守的な社会意識との結びつきが明らかになった。それに対して、昭和30年代の理想化は、精神的な充足や家族などの自分の身近なものの重視に関わるものである。

過去の時代に対する理想化と言っても、過去の日本社会一般といった場合と、昭和30年代という特定の時代区分への認識では異なる社会意識との結びつきや構造を持っていると考えられる。

## 5 今後の課題

「伝統」的な要素との関わりについては、若年層に限らず、世代全体において、1998年以降、「伝統志向の傾向の強まり」(NHK放送文化研究所, 2015:246)が指摘されるが、そうした社会思潮との関わり合いについて考察を深める必要があるだろう。

### 注

- 1 本稿は日本社会学会大会における報告(2018年9月15日、甲南大学、文化・社会意識部会、浅岡隆裕・青木久美子)を下敷きにして、改稿したものである。
- 2 科学研究費 基盤研究(C)「現代日本における昭和ノスタルジア志向の実証的研究」(課題番号:26380711、研究期間:2014~2017年、研究代表者:浅岡隆裕)
- 3 見習うべきことがあるとの回答者に対象となる分野を尋ねた。「教育・しつけ」「モラル・道徳」といった倫理・規範の比重が高い。全般的に体験世代の首肯率が高く、20~40代の方が高いのは「経済・産業」「芸術・文化」などであるが、年代差は少ない(浅岡, 2018:37)
- 4 以下では注記がない限り、非体験世代である20~40代をベースに、サンプル1036を進めている。
- 5 50代については、直接体験があるかどうかあいまいなために、分析から外している。
- 6 ここからは見習うべきかどうか「わからない」との回答(全回答の35%)を省いて分析した。
- 7 意識に関わる28項目のうち、相関係数が0.35以上のものをソーティングしている。
- 8 筆者らの別実施のWEB調査(2016年9月)では、“興味がある時代”“よいイメージがある時代”といった設問で、昭和年代を並べているが、20~40代は、昭和30年代についての興味、好印象は高くなく、単語レベルでは積極的な意味を喚起するものではなかった(浅岡, 2018:31)。

### 【引用・参考文献】

- 浅岡隆裕(2018)「年代差からみる昭和時代についての意識と態度」『立正大学大学院文学研究科紀要』第34号, 27~52頁
- 浅岡隆裕(2012)『メディア表象の文化社会学 ―<昭和> イメージの生成と定着の研究』ハーベスト社
- 浜井祐三子 編著(2017)『想起と忘却のかたち:記憶のメディア文化研究』三元社
- 高野光平(2018)『昭和ノスタルジー解体:「懐かしさ」はどう作られたのか』晶文社
- 楠見孝 編(2014)『なつかしきの心理学 ―思い出と感情』誠信書房
- 宮田穰(2016)『昭和30年代に学ぶコミュニケーション』彩流社
- NHK放送文化研究所 編(2015)『現代日本人の意識構造(第8版)』NHKブックス